





平安時代の竪穴住居跡

# 遺跡だより①

多摩ニュータウンNo.27 遺跡

(遺物)が数多く見つかっており、いくつもの時代が複合する遺跡であることが分ってきました。しかしながら、時代により発見される遺構・遺物の種類や数量に差があることから、この場所と人々のかかわりあい、各時代ごとに異なっていたものと思われれます。



本遺跡は、多摩市落合上根にあり、芝田川に面した南側の低地と、それに続く緩やかな斜面地に立地しています。発掘調査は、東京都土地区画整理事業の宅地造成に先だつ、記録保存を目的としたものです。約八千五百㎡の範囲を対象に、昨年10月から9ヶ月間の予定で、調査を進めています。

これまでの調査の結果、縄文時代から江戸時代までの長い期間にわたる、先人たちのさまざまな生活の痕跡(遺構)や、残された物

## 平安時代



動物を捕えるための罠し穴と考えられる土坑のほか、当時使われていた土器の破片や、石のやじり・打製石斧(土掘り具)などの石器が、わずかに見つかっているだけです。おそらく縄文時代の人々は、この地を狩りや植物採集の場所として利用していたのでしょう。

現在までに、9世紀のはじめから中頃にかけて作ら

## 文化財講座(1) 遺跡はいくつあるか

過去の人間のいるいろいろな活動の痕跡が残されている場所を遺跡とよぶが、多くの場合、その痕跡は長い年月の間に地中に埋まり、地表から確認できるものは少ない。遺跡を発掘すると、そこからは住いの跡である

とところで、日本に遺跡はどこぐらいあるだろうか。昭和三年に刊行された東京帝国大学編纂の「日本石器時代遺物発見地名表」第五版には、全国(樺太等を含む)で一万二八一九所の遺跡が記載されている。当時、



昭和50年の遺跡分布密度図(揮毫文化財ニュース第3号より)

この遺跡数は非常に多いものと考えられていた。戦後、文化財保護法が制定され、全国規模の分布調査が実施されるが、文化庁の資料によると、昭和三五年から三七年にかけて行われた調査で九万八千カ所、昭和五〇年に二〇万カ所、昭和五五年には二六万カ所に増加している。これを我が国の総面積三七万七千km<sup>2</sup>で割ると、1kmあたり〇・六九カ所の密度となる。次に東京都内の遺跡に目を向けてみよう。現在、都

内には約四七〇〇カ所の遺跡が確認されているが、昭和三七年の基本調査で七四七カ所、昭和四七年の分布調査では三六一八カ所に増加している。都の総面積が約二千km<sup>2</sup>であるから、遺跡密度は1kmあたり二・三五カ所という勘定になる。

また、当センターが現在調査を行なっている多摩ニュータウン地域は、日本でも最も分布調査が密に行われた地域であるが、当初三八カ所あった遺跡が数次に亘る分布調査により、現在では八八三カ所に達している。遺跡密度も1kmあたり二九カ所ときわめて高い。このように、各地で分布調査が行われるたびに、遺跡数は飛躍的に増加するが、いったい遺跡はいくつあるのだろうか。その実数については窺い得ないが、遺跡が当時の具体的な活動の痕跡であるが故に、遺跡数の増加は確実に、当時の実体に接近しつつあることを意味している。(可児)

## 鎌倉



があり、当時この村は、瓦の生産ともつながりのあったことがうかがわれます。建物を建てるために、斜面地を平らに削って整地・区画した場所が4ヶ所あり、この部分を中心に、鎌倉から江戸時代にまでおよぶさまざまな遺構が、重なり合った状態で数多く発見されています。鎌倉時代以降もこの場所が人々の生活の拠点となり、屋敷などが建てられていたことが明らかになっています。

この時代の遺構としては、掘立柱建物跡群、井戸跡19基、溝跡13基、土坑多数のほか、中世の特徴的な遺構である地下式横穴(墓や貯蔵施設と考えられている)も9基見つかっています。また遺物の種類も豊富で、中国から輸入された磁器、国内各地で焼かれた陶磁器類、かわらけ・ほうろくな

## 多摩の歴史を訪ねて①

### カタクリの咲く 片倉城跡



意外なことに出会うと、ホッとすることもあるもので、春先に、片倉城跡を訪れると、可憐なカタクリの花が待っていた。

片倉城は、鎌倉幕府の有力豪族大江氏の一門、長井氏によって築かれ、その後、戦国大名後北条氏の支配下に入り、北条氏照のよつた八王子城と小田原とを結ぶ往来上の支城として機能したが、豊臣秀吉の攻撃によって落城し、廃城となる。

中世の城の構造は、平地に立地し、日常の生活を営



発掘調査のようす

以上の調査によって、先人たちの長い時代にわたるこの地を舞台としたさまざまな生活の様子が、明らかにされつつあります。調査は引き続き6月末まで行なっており、興味をもたれた方は折を見て見学におこし下さい。現地は、多摩センター駅から北東へ五百mほどの距離で、徒歩約5分の位置にあります。(川島・山口)

む居館(濠や土塁で囲まれている)と、いざ戦闘の時に利用する山上の城郭とかならなっている。現在、史跡公園となっている丘上部分は城郭に相当し、居館は南麓に推定されている。丘上には二つの空濠が今でもよくわかり、西からの攻め手を防ぐ。一方、カタクリの咲き群れる北へ東麓は湿地で、兵馬はこの方面からは攻め難い。かつての湿地は現在整備されて、一部は池となつている。城跡を訪ねる時は、攻める武将の気持になつて歩くとよい。

片倉城跡は中世の山城の典型的なもので、東京都指定文化財(旧跡)の指定を受け、現在は、八王子市が管理する史跡公園として整備され、公開されている。国鉄横浜線片倉駅の西へ徒歩三百米、京王電鉄の京王片倉駅の東南四百米国道十六号線に面している。

最後に一句  
城落ちて、カタクリの咲く  
カタクラ城(加藤)